皇国の人民たらんとの誰か敬愛の心なからんや、
かかる著明の尊き御神にましまして、今日殿宇の荒廢する豈に徒手して拝観するに忍んや
されども僅、この氏子徴力の反所にあらず、依りて、再建並管内一般へ募縁の宮許を得て、普く寄進の力を請ふになん冀くは四方及諸君、金殻を問はず、多寡を論せず、眞誠の寄附ありて造營の力を助け賜は、直に氏子の幸福のみならず、神慮を安く奉りて長く国家の呵護を祈むと云ふこと爾り。

直江重治　在印
安部得兵衛　在印
松川義八　在印
（以後略）

参考資料
続日本後紀　三代実録
火売神社年表　加藤氏系図
鶴見氏譜系図　弘安図田帳
玖珠郡誌　久士目家文書
半田康夫氏火売神研究控

豊後浄瑠璃への挑戦

河野清文

「降りよる」「降っちょる」という郷土の方言ほど、現在進行形を適確にあらわす言葉はないといわれます。

方言は、標準語が国家統一の手段に用いられるようになって以来、国家統一を妨げる「悪しきことば」というレッテルが貼られてきました。そのため、放言研究はもっぱら「悪しきことば」を標準語に修正する手立ての一環として、言葉そのものを解剖し標準語にかえてしまうための研究だったようです。

このような、方言を消し去るための方言研究に対し、画期的な指針をあたえたのが柳田國男の「蝸牛考」でした。方言の中から常民の文化構造、地方の固有性やその相互の関連を明らかにする新しい分野が開かれ、方言が日の目をみるようになりました。

今日、マスコメディアにより言語の画一化が進み、地域の風土や歴史に育まれ、生活語として親しまれてきた

方言が、再び消し去られようとしています。

ところで、方言の精通度がその地域えの定着度を示すとするならば、豊後浄瑠璃でどのくらい笑えるかがそのバロメーターとなるのではないでしょうか。

豊後浄瑠璃の内容は、渡辺綱の羅生門鬼退治の段で、羅生門が愛宕山や大江山に変わることがありますが、内容の大意は同じです。豊後一円に口伝で伝承されているため、地域により方言の違いがあり、オリジナルといったものはありません。語りは、チントン、チントンと口三味線でわずかに節を付けます。緩急は語り手の自由で正調というものはないようです。

その一　　利光諒一氏

そもんそもん　渡辺ん綱ちゆうち　上んでえかる　下んでえにかけち　あっちあられん　偉えやつなら　朝んつうかり　はね起きち　裏んためいき　いち　つろう　のんぼりくんだり　二三べん　けえなぜち　ちえばのう　かむかむもどっち来ち　かかん　おへもう　蹴つち蹴起し　「おりやあ　きゆうのう　あたごん山えいち　鬼のうぢゆう　取つちこにやならん」　ちゆうと　おへまききつけち　「あんたもし　何ゆ言いやんするかな　こん米ん高えにい　わしや　ひるめしや　てえちあげやんせんぞな」ちゆうつ　「わが　何ゆう知つたこつがあるか」　ちゆうち　おへまん　顎とう　蹴ち蹴はなしや　おへまあぐうち　そりくりかえっちい　屁をたれた　やんがちんこる　痩せ馬う　どだ引きでえち　玄関に横づきしち　やつちやまかせち　打ち乗っち　馬んけつしたたかくれつくりやあ　馬あ　ちゆうんごつ　とびでえた

あたごん山え　なりぬれば　馬あいななく　風や吹く吹く　すきまじゆうにぞ見えにける

かかるとこりい　黒雲ん中かる　何とんかんとん　知れんやつが　大きなうじゆう　によきとさし出えち　綱ん兜しこるう　ぐいとひつこうだ　行こうどすりやあどちどちどち　もどろうどすりやあ　よちよちよち　行こうん　もどろん　なつちくせえ　綱あ　もとより　えれえ奴なら　腰のだんびろう　どだ引きにいぢ　切る切

れんな　鍛冶屋い　知つちよる　光れ光れちゆうち　ふりくりまええち　鬼のうぢゆう　なりくびかる　切りおとしや　鬼や　うういな　なきゆうあげち逃げうせた
二日ん　三日ん　たたんうち　婆いりにけり
「綱んわりや　えれえ　ちえがろう　したちゆうのうそん　鬼んうぜちうもにゆう　見せなありい」　ちうつ綱あ　「いんげえ　いんげえ」　見せんちゆう　「そういわんちゆうつ　見せなありい」　ちゆうつ　綱あ　図に乗りくりあがつち　なんどん　すみん　古びつん中かる　でえちきち　見せた
「鬼のうぜちゆうもなあ　赤うぢ黒うぢ　毛がはえちうらさきやあ　むけくりあがつちよるのう　おお　これこす　おれがうぜじやあ」ちうち　烟り出しう　ふきにいぢ　どことむなう逃げうせた
綱あ　はかられたか　ざんねんじやちうち　かまちいくれえちいち　男泣きにぞなきにける

その二　　北原白秋著「季節の窓」より

昔　昔　渡辺ん綱　ちふやたあ　上んぢいかり　下んぢいかけち　あつちえあられん　ちんぷな　偉い奴なる大江山え　鬼う狩りい　行くちゆふち　朝んつうかるはね起きち　うらん溜いきい　行ちやあ　面あのんぽりくんだり　二三べん　けえ撫でち　がたがた雪隠にかけくうぢ　くさあ　小山んしこほど　ごたごたごたごた　巻きにいぢ　もどつち来ちえ　家れえん凹すきゆう　蹴つち蹴まわしあ　おへま　納戸ん隅かる　赤べこ　かきかき　ぢえちえ来ちえ
「あんた　何いいやんするかな　こん米ん高えに　わしやあ　昼めしゆうてえち　あげやせんぞな」ちゆいふ綱ん　「かかあ　うんが　何ゆ知つたこつがあるか」ちゆうち　おへまぐけつかぶう　蹴つち蹴あぐりやあ　おへま　「あいた　ううん」ちゆうち　くせえ屁をたれた
　やんがちんころ　まやん隅かる　痩うもう一疋　とだびきでえち　風あ吹く吹く石あつうぢ　大江山にぞつきにける
やんがちんころ　何処とん　此処とん知れん　黒雲ん中かる　綱ん　兜んしこるう　ぐいとつかまゆりやあ　綱ん　行こうどちすりやあ　どちどちどち　戻ろうとすり

やあ　どちどちどち　行こん　戻ろんなっちえくせ　綱ん親重代の鰯丸　腰のだんびらどだびきでえち　「切る　切れんな鍛冶やが知っちよる　光れ　光れれ」　ちうち　打ちふんにけり　綱んよくよく見ると　鬼のうぢえぐ　もげちよった

綱ん　よろくうぢ　持っちえ戻っちえ　納戸ん　古びちい入れちよきやあ　二日ん三日んたったころ　婆ぐ　下駄ん音ん　からんころん　言わせち　やっちえ来ちえ

「綱　綱　わりやあ　こんうちやあ　ちえんぷな　えれえこつう　したちゆうが　おりい　そんおんのうじゆうみせんか」ちゆうち　綱ん　「いんねえ　いんねえ」ちゆう　「そう言わんつ見しいのう」ちゆうち　綱んやたあ　図に乗りやがっちえ　納戸ん古びちかり　鬼んうぢゆう持っちえ来りあ　婆ぐ　ちえへ持っちえ見ちえ

「こうり　こり　是れこすおりぐうぜぢや」ちゆうち

烟出しう　突きにいぢ　黒雲になっち　失せにける

綱ん　たばかれたちゆうち　地団駄ふんじ　かまぎいくれえちいち　男泣きにぞ泣きにける

橋本義人氏

その三

昔　昔　そん昔　さちえむ　源んれえ光様んけれえん渡辺ん綱ちゆうは　きんたぢえ鍋ん児た違うほづい　朝んつうかり　さぢえくりおきちえ　道ばたん　かんからいぎい　うもを　つねえぢ　前んたねえごち　つろうば二三べん　けえくり洗うち　ちえばのかむかむ　もどっちえ来ち　下男の三助う　けっちえ蹴起こしやあ　三助あ　へかあ　いやじりゆう嫌うち　旦那旦那　まあ　ざむねえ早うかり　どきい行くのんかえ　うん　おりやあ

よんべれえ光様んまいい行ったら　羅生門ちゆうところにや　鬼がぜえるきい　行っちえてえらげちくい　ちゆうきい　行かにやならん　駄にくろう置けちやあ　旦那ん　おれむ一緒に行かうかへ　うんにや　えずいもんぢえる所　わぐどうぐ　来る所じやねえちゆち　そろそろ仕度い取り掛かりやあ　さなりゆうきいたか　おごりゆんが　納戸のすまかり　ふり〇〇〇ぢ　泳ぎぢえちえ

「まあ　これんもんぬ見ち呉りい　あっちえむあられん着類はき崩いち　保昌殿どむ遣っちよきやいいに」ちやあ　「何う小癪なそこのけ　おへま　おなぐどむの知っ

たこつぢやねえ」　ずなしのうう足う　あごてえひと蹴り　のけぞりかへつちえ　くせえ屁をたるりやあ　綱むたまらん鼻つまむ　三助あ　駄を玄くわがまちい引きつくりやあ　どてまかしよいと打ち乗つちえ　「向うん山んずんた　それ用意がよくば　早参れ」ちゆうち　馬へせえさしゆうくわせち　羅生門さしちえ急ぎ行く

はや羅生門になりければ　馬あ打つちえむ　小突いちえむ　行つちえくせえ　あつちにやぐわたぐわた　こつちにやぐわたぐわた　綱む　何ぢえん　此処ぐ　うさんくせえとこるちゆうち　まなくう　八方にくばつちよるとこりい　雲ん原かり　さざえんような　ちえを出えち

綱んたぶそを　ぐわつしと掴みやあ　綱むたまらん　親重でえ伝わりもんの　ぼうぶらん蔓切丸う　ひこずり抜いち　切るる切れんな　鍛冶屋ん　打つちようん　研ぎようん　勾べえん　理屈のぐはええによる　光れ　光れちゆうち　鬼のかいなをぐわつしと切りやあ　鬼にやあ「きやあ　きやあ」ちゆうち　黒くむう　さして消え失せたり　綱ぐ　腰の浅黄の風呂敷きゆう取り出えち　鬼のかいなをひつ包み　背中へ横がるいに　ひつかるうち　吾が家をさちえ　帰りけり

綱ぐ　内い戻つち来りやあ　隣のおば嬢ぐ　やつちえ来ちえ　「綱　わぐ　途方もねえちえがろう　したちゆうぐ　おりい　見せち呉るこたあなるめえか」ちやあ　綱む　伯母嬢ん言うこつなら　見せざあなるめえか」ちゆうち　納戸ん　古わんびつの底かり　桐の七重ん箱を取り出えち　「まあ見なはりい」ちゆうち　見すりやあ

「ううん　こりやあまあ　毛のむぐむぐと生えちよるもんのう　こりくさ　おりがかいな」ちゆうち　烟出しかり　ぷいと出りやあ　綱あ　たばかられた　ちゆうちゆるりがまちい　かぶしりちいち　男泣きにぞ泣きにける

参考文献　「大分県方言考」昭和八年発行